日本語における半濁音化をめぐる問題

――声明資料を手掛かりとして――

浅田健太朗

目次

一、「半濁音化」に関する先行研究と問題の所在
二、声明資料における半濁音符
三、ハ行音の分布と半濁音化の要因
四、覚如版の連濁の実態
五、周興版の連濁の実態と覚如版との比較
六、[Φ]か[p]か
結び

一、「半濁音化」に関する先行研究と問題の所在

日本語における両唇閉鎖音[p]については先学によって様々な研究が成されており、それは大きくハ行音に関わるものと、半濁音化[1]によって生じる[p]、すなわちパ行音に関わるものとに大別できよう。

前者に関しては、ハ行音の音価は複雑な変遷を辿っており、それ故音韻論的にも様々な解釈が与えられてきている。

音価としては［p］＞［Φ］＞［h］と調音点を後退させていく唇音退化現象が通説となっているが、［p］＞［Φ］になった時期については諸説が有る。

後者についてはその出自に関して諸説が提示されている。字音語の場合に限れば、ハ行音としての［p］が促音後、撥音後の両環境において残ったとする説と、ハ行音としての［p］に関係無く新たに発生したものとする説が存する。また表記上に痕跡を残さない現象であったが故に、音声レベルで［p］に変化する現象がどの時期に発生し、どのような状態であったのかは判然としない。

抑も半濁音化現象は、連濁、促音化と密接な関わりを持ち、それに準じて説明される事が多いが、明確にその音韻論的な発生について位置付けを試みている先行研究は少ない。沼本（一九九八）は現代日本語の音素/p/について、「日本語のハ行子音が両唇音Φ-から、調音点を後退させて漸次h-に移行するにつれ、それまで異音の位置にあったp-が音韻として意識されるようになる」[2]と述べており、音韻論的な成立に関してはこの説明で妥当かと思われる。

音声レベルにおける［p］音化の成立論となると、先述のように古代語における［p］音との関連を論点として大きく二説に分かれる。その両説に関しては迫野（一九八九）に詳論が有る[3]のでここでは簡単に触れるに留めるが、問題を字音語に限れば［p］の偏った分布、すなわち促音と撥音の後にしか現れないという事実をどう捉えるかであろう。一方は促音と撥音の後を「特殊な環境」と捉え、その特殊性故に古代の［p］音が生き残ったとする。一方は促音・撥音が音韻として成立した事により新たに［p］音が発生したとする。そしてその両者を取り入れた柳田（一九九一）は次頁の表のように纏めている[4]。

すなわち、前者の言う「特殊な環境」を音声学的な要因と捉え、唇音［p］［m］にハ行音［p］が後続する場合等は古代の［p］が残存したものとし、その環境以外は促音便、撥音便の一般化と共に［Φ］から［p］に転じたとする。

またその音声レベルでの発生時期について奥村（一九七二）は[5]、

p音の現れるケース	残存・新生											
擬声擬態語	○											
音便	上代の音便の条件にあうもの	○	×									
	条件にあわないもの		×									
強調表現			×									
入声音の後	p入声音の後	○	×	△								
	t入声音の後		×									
	k入声音の後		×									
	唐音			△	□							
撥音の後	m撥音の後	○	×	△								
	n撥音の後		×									
	n撥音唐音の後		×	△	□							
その他					□							

○古いp音が残存しているもの
×後にΦ音から新生したもの
△後に中国語からもたらされたもの
□成立したp音を用いたもの

半濁点表記の存しない頃の状態は不明であるが、つぎの如き、促音直後のハ行子音などは、破裂音的に発音される事が多かったと考えられる。

「骨法（コッハウ）・匹夫（ヒッフ）」（三巻本字類抄）「かっはと（擬声語）」（日蓮遺文如説修行抄〜一二八二年）

ただし、促音の影響による摩擦音Fの破裂音化は、促音発生の当初から、普遍的に起ったとは限らない。キリシタン資料あたりまで下っても、例えば「日本」の表記に関し、「nippon（ドチリナキリシタン）niffon（コイヤード文典）」[6]

の両形が対立するという状態である。もっと古い時代においては、摩擦音Fが、促音の直後に現れるという様な事も、相当あったのであろうか。一方、「奔波（ホンハ）・偏頗（ヘンハ）」（三巻本字類抄）の類についても、これを半濁音表記と見なす説が有るが、撥音直後のハ行音はむしろ、濁音であった可能性が大きい。現に、「偏頗」の例は、「：頗」の如く、濁点が付されている。もともと、撥音直後のハ行音に関する半濁音化は、比較的おそかったらしく、現代京都語においても、「三派（バ）・三辺（ベン）・三方（ボウ）」等の半濁音形は、「三羽（バ）・三遍（ベン）・三宝（ボウ）」の如き濁音形よりも、新しい熟合語と見なされるのである。

とし、迫野（一九八九）は、

唇内入声に続くハ行音はこれ以前（筆者注・平安末期の九条家本『法華経音』で唇内入声韻尾が［u］に変化する以前）にすでに促音下のp音として実現する形態的特質を完成していたと見ることができるのではないかと思われる。舌内入声に後続するハ行音の場合も恐らくこれと並行的に考えることができるものと思われる。

とする。つまり、促音後の［p］音化は促音の成立と共に始まったとされ、撥音後の［p］音化は促音後のそれより遅れて始められたとされるが、明確に論じられていない状況が窺える。

従って問題となるのは、半濁点表記が存在しない時代の促音後、撥音後のハ行音の状態が如何なるものであったかである。右に有るように、撥音直後のハ行音は当初濁音であったという説が有力であるが、それが［p］音化した時期や、／Φ／音素上にある条件異音の位置にあったと言われる［p］の実態を実証的方法で明確に位置づけた論は無い。またその為に半濁音化発生の要因についても詳述されていないのが実状である。本稿では以上の点について、これまで積極的に用いられてこなかった声明資料によって考察を試みる。

二、声明資料における半濁音符

本稿では『覚如版法華懺法』と『周興版法華懺法』の二つの声明資料を扱う。この二本は内容がほぼ対応しており、通時的な対照が可能である。

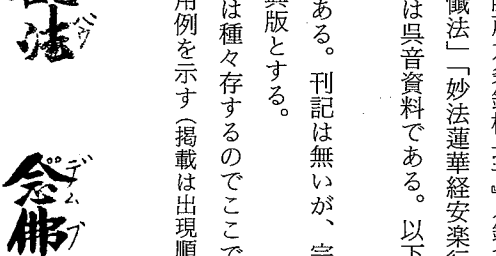
『覚如版法華懺法』

刊記無し。天台系声明譜本。但し仮名の字体などは『大原三千院蔵九条錫杖長音』（鎌倉文永七年奥書）と酷似しており、同じく鎌倉時代の資料として扱う。収録曲目は「法華懺法」「妙法蓮華経安楽行品」「九条錫杖」で、「法華懺法」「妙法蓮華経安楽行品」は新漢音資料、「九条錫杖」は呉音資料である。以下覚如版とする。

『周興版法華懺法』

底本の奥書と見られる識語に文亀二年（室町時代・一五〇二）とある。刊記は無いが、宗淵の開版と見られ、江戸時代末期刊か。天台系声明譜本。『例時作法』と共。以下周興版とする。

さて、この内周興版には半濁音符が出現する。[7] 半濁音符についての論及は種々存するのでここでは割愛するが、周興版の半濁音符は仮名右肩に点が一つのものである（左コピー参照）。次に全用例を示す（掲載は出現順、半濁音符は現行のものを使用する）。



〔促音後〕（三四例）

法幷、闥婆、八部、八部、北方、北方、北方、法寶、説法、説不、佛法、卒暴、説法、説法、説法、説法、説法、實不、實法、説法、勿抱、佛寶、法寶、十方、説法、七寶、七菩、及寶、北方、十方、十方、十方、十方、説法、十方

〔撥音後〕（四一例）

三寶、人非人、三寶、三寶、歎佛、南方、南方、南方、三寶、三寶、三不、善報、見不、纏縛、轉法、還本、几夫、面奉、三寶、文筆、念佛、念佛、観法、三寶、檀波、念佛、念法、念法、心不、遍覆、南方、遍覆、遍覆、遍覆、三菩、三菩、三菩、三菩、聞佛、身半、身皮

右のように、周興版では半濁音符によって後続のハ行の音価が［p］である事が確認出来るのであるが、濁音符と共にかなり書き分けが為されていると見て良い。これはすなわち、音韻的に/b/並びに/p/が成立している事を示唆している。半濁音符は恐らく宗淵の手によるものと思われ、従って江戸後期には半濁音の書き分けは厳密に行われていたと推測されるのである。

また、促音後（唇内・舌内入声韻尾が前接する）、撥音後（唇内・舌内鼻音韻尾が前接する）のハ行子音について振仮名が付されたものを見てみると、以下の分布になる。

〔促音後〕（全七四例）

ハ行表記（四例）

説非、佛法、佛秘、實法、

パ行表記（三四例）

用例は先の通り。

無表記（三六例）

〔撥音後〕（全八五例）

ハ行表記（九例）

根奉（コンフ）、音菩（イムホ）、満法（バンハ）、善奉（センホウ）、門法（ボンハウ）、梵波（ハムハ）、肩佛（ケンフ）、願必（グワンヒツ）、見彼（ヒ）

バ行表記（五例）

三寶（サンボウ）、根本（コンボン）、千幅（プク）、聞法（モン）、深法（ジムボウ）

パ行表記（四一例）

用例は先の通り。

無表記（三〇例）

以上を見ると、促音後環境においては［h］[8]［p］が、撥音後環境においては［h］［b］［p］が現れるように見える。しかしながら、個々の例をつぶさに観察し、熟語としての結合性の有無という観点を考慮に入れると、もう少し整理する事が出来る。

まず促音後であるが、本資料には小書きの「ッ」が採用されており、それが促音表示専用[9]に使用されている。すなわち、先行字の振仮名が無表記の例を除くと、促音後環境では半濁音符を有するハ行字の前の「ツ」が全て小書きになっている。それに対して半濁音符を有さないハ行字の前の「ツ」には小書きが見られず、また「チ」や無表記の例も多い。従って、促音後環境の半濁音符を有さないハ行字の用例は促音化していない例であると解釈出来る。つまり、促音後環境における促音後のハ行音は周興版では確実に半濁音化が見られる。

撥音後のハ行音は促音後環境に比すると半濁音化する割合が減じているとする事が出来る。また熟語としての結合性を考慮に入れると、撥音後の半濁音符・濁音符を有さないハ行字の例は熟語とは見なし難い。その前後を見ると、構造上全ての結合性が弱いからである。すなわち「根奉」は「善根・奉福」、「音菩」は「観世音・菩薩」、「満法」は「弥満・法界」、「善奉」は「諸善・奉行」、「門法」は「沙門・法」、「肩佛」は「有焰肩・佛」、「願必」は「行願・必・果遂」、「見

彼」は「面見・彼佛」となり、全て意味的に複数の熟語に跨っている例と解釈出来る。また「梵波」は、梵語の音訳部であるので除外すると、一語としての纏まりを有す例は撥音後のハ行表記には無くなる。

従って、周興版における、熟語としての結合性を有すという条件下での後行字頭子音の音声的現れは、[p]（/Q/の後ろで）、[b]［p］（/N/の後ろで）となる。実際には[p]［b］の両音は音韻論的に独立的な位置を占めているので、表1に示す様になる。

表1　周興版におけるハ行音の分布

	環境		音韻レベル	音声レベル
ハ行音	/Q/・/N/以外の後ろ		/h/	[h][ç][Φ]
	/Q/の後ろ		/p/	[p]
	/N/の後ろ	連濁しない場合	/p/	[p]
		連濁する場合	/b/	[b]

三、ハ行音の分布と半濁音化の要因

前節で見た周興版の促音後、撥音後のハ行音の分布において、促音後環境で［p］のみとなるのは、先引のキリシタン資料の例「niffon」の如き促音の後に摩擦音が後接する用例が存在する様相と異なる。しかしキリシタン資料における「ff」表記を促音後に[Φ]がきたものと解釈する点に関しては、柳田（一九九一）が疑義を差し挟んでおり、[10] 筆者もそれに従う。

そもそも促音後の［p］音化に関しては、浜田（一九八三）、迫野（一九八九）が「促音の完全な実現をはかる」為に、摩擦音である［Φ］を回避したという音声レベルにおける原因を提示しており、[11] 従うべきものと思われる。ハ行音が摩擦音という点は変わらない現代語の状況を見ても基本的に促音の後にハ行音は続かないので、[12] 矛盾は無いと思われる。

撥音後環境で［b］［p］に分布するのは、迫野（一九八九）の指摘した日葡辞書の分布、[13] 並びに現代語の状況[14]と一致

する。撥音後の［p］の発生理由として、浜田（一九八三）は語頭及び母音音節の後に/Φ/、促音後に/p/、撥音後に/b/という対応が音韻論外の理由によって混乱を起こした為とし、[15]迫野（一九八九）は促音と撥音の「密接な音韻論的」関連性を重視し、「『急促ル声ノ下』に成立したp音は、やがてその促音と密接な関連を持つ撥音に続くハ行音をもp音に変えていった」[16]とする。両説は撥音後の半濁音化の原因として音声的要因、つまり鼻音と［p］音との両者に何らかの音声的な繋がりが存する事を却下している事で一致しているが、前者は音韻論外の要因に原因を求め、後者は撥音と促音との音韻論的な関係に原因を求めている。

対して柳田（一九九一）はm撥音に続く場合とn撥音に続く場合に分けて考えている。ごく大まかに言えば、-mΦ-形よりも、-mp-形の方が「安定した形」であるとし、m撥音の場合もn撥音の場合もより「安定した形」で落ち着いたとする。[17]

以上のように、撥音後のハ行音が［p］音化するメカニズムについては諸説有るが、筆者の考えでは柳田（一九九一）の説が周興版の状況を説明するのに都合が良いように思う。

すなわち、周興版では語中の［h］と［p］は同環境下に現れず、促音後及び撥音後に［p］、それ以外は［h］として現れる。従って［h］と［p］は互いに排他的な関係であって、相補分布を成していると言える。先引の浜田・迫野説の様に撥音後の［p］を促音後と撥音後の混乱、乃至促音後環境から撥音後環境への流入と考えるならば、このように整然とした分布には落ち着かないのではあるまいか。だとすれば、やはり撥音後の［p］にもより規則的な、音声レベルでの説明が必要となるが、問題はなぜ-mp-形が安定した形であり得るのかという点にある。

その際、手掛かりとなるのは先述の促音後の［p］音発生の理由である。先述したが、浜田（一九八三）は「破裂音［p］は、その前に挿入された促音を完全な形で実現すること、即ち呼気の停止を確実に行う為に、摩擦音［Φ］から無意識的に変化したもの」[18]であるとされている。更に迫野（一九八九）は、この浜田（一九八三）の意見を次のように纏めている。

促音音韻の本質は、有坂秀世氏によれば「発音運動の突然の停止」であるとされるが、サ行音やハ行音は、その点で理想的な条件にあるとは言いがたい。ともに摩擦音を頭子音とし、呼気の完全な停止が行われないからである。サ行音のオトッツアン（お父様）チッチャイ（小さい）ショッチュー（始終）のような促音の後の破擦音化は、その点を補正しようとしたものと見ることができる。ハ行子音の促音の後のp音化もこれと同一線上で考えることができる。

ただし、サ行音の場合はその転換はなお語彙的な段階に止まっているが、ハ行音の場合は、促音の後では規則的にp音になっている。これは、ハ行音の場合は、幸運にも促音の完全な実現を助けるP音が音韻として定着し易い条件のもとにあった。すなわち、ハ行音価の変遷によって、音韻体系の中にk:g=t:d=( ):bという空位があり、これを埋めるべく促すところの体系の要請があった。この遇合によって、新たなP音が国語音韻体系の中に容易にその座を占めることが可能となり、ハ行に直前する促音もまた、その為に規則的かつ完全な実現をはかることが出来るようになった[19]

この促音の本質「発音運動の突然の停止」を撥音にも当てはめられないだろうか。すなわち、促音の本質が「呼気の完全な停止」ならば、撥音の本質は「鼻腔への呼気の流出」である。換言すれば撥音も口腔からの呼気の流れは完全に停止するのであり、この両者は口腔へ呼気を流出しないという点で一致している。抑も促音と撥音は共に物理的に固有の音声を持たず、後接する子音の影響を受ける音素であり、両者の違いは鼻音性の有無にある。促音後にハ行音がくる場合、逆行同化して摩擦音である［Φ］の口の構えをすると口腔への呼気の流出を防ぐ事が困難となり、その為に促音の音価は［p］に変化し、それによって後接の子音も［p］となる。一方撥音後の場合、口腔への呼気の流出を後接する子音の調音点を利用して堰き止め、鼻に抜く。つまり摩擦音であるハ行音が後接する場合、やはり両唇によって口腔への呼気の流出を防ぐ事が困難になり、その為に撥音の音価は［m］に変化し、それによって後接の子音も［p］とな

る。つまり促音後、撥音後とも口腔へ呼気を流出せずに直後に摩擦音を発音する事が困難である点は変わりないのである。

従って撥音後の半濁音化の発生は、周興版、日葡辞書、現代語において撥音後のハ行音が規則的に［p］音化する事から考えるに、撥音が後接の子音の影響を受ける鼻音である事に起因すると考えられるのである。以上半濁音化の発生原因について述べてきたが、撥音後の［p］について鼻音の性質を材料に音声レベルにおける理由付けを試みた。(20)

四、覚如版の連濁の実態

さて、周興版では既に半濁音符も成立し、それが［p］音が音素としての地位を確立している事の現れでもある事は既に述べたが、それより前の時代の、音素/p/が成立していない時期の同環境の音価はいかなるものであったかは、文献上の限界により直接それを窺う術が無いのが現状であった。しかしながら声明資料は実際の発声を出来る限り忠実に書記上に写し取っている事が期待できる上に、本稿で扱っている『周興版法華懺法』は更に古い時代の資料性を有す『覚如版法華懺法』との対照という方法を採る事が出来る。無論覚如版では半濁音符は使用されていないので声点に注目すると、周興版で半濁音符が付されていた字の覚如版との対応部分には、声点が付されていない字を除けば全て単声点が加えられている。周興版での半濁音符例七十五例の内、覚如版では十四例に声点が打たれ、その全てが単声点である。(21)

撥音後環境の例に単声点が付されているのは、序で引いた「半濁音化以前は濁音化していた」という説とは相反する事実である。それはさて置き、この単声点は単純に次の二通りの解釈が可能となると思われる。

①単声点の音価は［Φ］である。

②単声点の音価は［p］である。

この二者択一の問題を検討する為には、連濁環境下の覚如版の声点の実態を把握する必要が有る。そこでここでは連濁する音声環境にある字、すなわち鼻音後の無声子音が、どの程度連濁を起こすかについて調べてみる。

連濁環境にある字の内、声点を有するものを以下に示す。猶、調査の際には熟語内の形態素同士の結合性には一切考慮しておらず、純粋に音声学的な条件を満たしたものを取り出した。(22)

〔単声点〕

厳-持、願-此、天-仙、心奉、観世、乾闥、人非、蓮華、三七、門現、今復、還親、親近、頻伽、今敬、善根、根奉、三十、眷属、藍内、願籍、善根、薫修、心敬、本-師、盡東、檀徳、三乗、雲自、音宿、真-浄、観世、尊大、賢-聖、貪着、三寶、暫停、三途、根出、讃歎、慚愧、真実、貧瞋、瞋痴、猿猴、慚愧、轉法、凡夫、云何、演説、臣官、文筆、変現、旋陀、聞比、親厚、近處、梵志、貧着、堅固、演暢、願衆、願諸、寅朝、門法、人生、三寶、檀波

〔複声点〕

三寶、三寶、縁覚、分身、蓮華、蓮華、蓮華、蓮華、文殊、蓮華、文殊、顔甚、分身、蓮華、文殊、眼根、眼根、洗除、眼根、種種、三寶、根本、蓮華、文殊、蓮華、文殊、文殊、親近、文殊、親近、親近、親近、親近、親近、親近、問訊、文殊、文殊、親近、親近、親近、親近、親近、親近、親近、親近、近處、親近、文殊、分身、蓮華、蓮華、勧諸、真諦

連濁環境下にある字の内、単声点が付された例は右の六十八例、複声点が付された例は右の五十五例、声点が付されていない例は二百二十八例である。また異なり語数について見てみると、単声点例は六十四語（頻度一が六十語、頻度二が四語）、複声点例は十五語（頻度一が九語、頻度三が三語、頻度十が二語、頻度十七が一語）となる。

両者の総用例数には大きな差は無いが、異なり語数では単声点例に比して複声点例の方が少ない。これは連濁が起こる語がある程度限られている事を示しており、出現頻度の高い語は連濁を起こす可能性が高い事を意味する。

以上より、覚如版における連濁は音声的な要因のみならず、熟語内の形態素間の結合力に大きく影響を受ける事が推測出来る。それは音声的要因のみを考慮して採取した右の用例が、連濁するものと連濁しないものに別れた事、また連濁を起こす熟語がある程度限られている事から判断出来る。従って、覚如版における連濁現象は既に音声或いは音韻レベルの同化では無く、語彙レベルで行われているものと見られる。

五、周興版の連濁の実態と覚如版との比較

さて、次に周興版における連濁環境下にある字も見ていく必要が有る。前節の覚如版との対応部分を観察した所、声点の付されている用例は左に掲げる通りである。猶、周興版には濁音符が使用されているので、これは複声点と同じ扱いにして合わせて観察した。

〔単声点〕

音宿

〔複声点・濁音符〕

分身、蓮華、蓮華、蓮華、蓮華、文殊、蓮華、文殊、蓮華、顔甚、分身、蓮華、文殊、眼根、眼根、洗除、眼根、種種、三寶、根本、分身、蓮華、文殊、蓮華、文殊、文殊、親近、文殊、親近、親近、親近、親近、親近、問訊、文殊、文殊、親近、親近、親近、親近、親近、親近、親近、親近、親近、親近、閑處、近處、親近、文殊、分身、蓮華、蓮華、勧諸、真諦

〔半濁音符〕

三寶、人非、三寶、三寶、南方、南方、南方、三寶、三寶、轉法、凡夫、面奉、三寶、文筆、観法、三寶

周興版では、連濁環境下にある字の内、単声点が付された例は一例、複声点が付された例は五十五例、半濁音符が付された例は十六例、声点が付されていない例は二百八十三例である。また異なり語数について見てみると、単声点例は一語（頻度一が一語）、複声点或いは濁音符例は十六語（頻度一が十一語、頻度三が二語、頻度十が一語、頻度十一が一語、頻度十七が一語）、半濁音符例は八語（頻度一が六語、頻度三が一語、頻度七が一語）となる。

覚如版との大きな違いは、単声点が付されている字が極端に少なくなっている事である。これは清濁の書き分けが厳密になり、それに伴う濁音符の成立によって清音を特に単声点によって表記する必要が無くなった事が理由であろう。この事は連濁環境下の対応部分を更に細かく見る事によって証明される。

〔覚如版に単声点が付されている例〕

（覚如版・単声点↓周興版・単声点）…一例

音宿

（覚如版・単声点↓周興版・複声点）…一例

蓮華

（覚如版・単声点↓周興版・半濁音符）…七例

人非、三寶、轉法、凡夫、文筆、三寶、檀波

（覚如版・単声点↓周興版・声点無シ）…六〇例

厳-持、願-此、天-仙、心奉、観世、乾闥、三七、門現、今復、還親、親近、頻伽、今敬、善根、根奉、三十、眷属、藍内、願籍、善根、薫修、心敬、本-師、盡東、檀徳、三乗、雲自、真-浄、観世、尊大、賢-聖、貪着、暫停、三途、根出、讃歎、慚愧、真実、貧瞋、瞋痴、猿猴、慚愧、云何、演説、臣官、変現、旋陀、聞比、親厚、近處、梵志、貧着、堅固、演暢、願衆、願諸、寅朝、門法、人生、檀波

〔覚如版に複声点が付されている例〕

（覚如版・複声点→周興版・単声点）…〇例

用例無シ

（覚如版・複声点→周興版・複声点或いは濁音符）…五二例

分身、蓮華、蓮華、蓮華、蓮華、文殊、蓮華、文殊、顔甚、分身、蓮華、文殊、眼根、眼根、洗除、眼根、種種、三寶、根本、蓮華、文殊、蓮華、文殊、文殊、親近、文殊、親近、親近、親近、親近、親近、問訊、文殊、文殊、親近、親近、親近、親近、親近、親近、親近、親近、近處、親近、文殊、分身、蓮華、蓮華、勧諸、真諦

（覚如版・複声点→周興版・声点無シ）…三例

三寶、三寶、縁覚

右の対応関係を見てみると、同じ連濁環境下においても覚如版で単声点が付されたものと、複声点が付されたものでは周興版での声点、濁音符、半濁音符の付され方に違いが見られる。覚如版で単声点が付されている例の多くは周興版では声点が付されないのに対し、覚如版で複声点が付されている例は複声点或いは濁音符が付されている事が多い。この事は先に述べた通り、周興版では清濁の書き分けが厳密となり、清音が言わば無標となっている為、声点を付す必要

が減じている事を示唆する。逆に言えば、単声点が付される事は非常に珍しく、特別に注意を促す必要が有る場合にのみ使用されるのではないかと考えられる。

更に言えば、周興版においては、本稿が問題としている半濁音符が付された例と、声点が付されていない例とを無視すると、覚如版で連濁を起こしている熟語と周興版で連濁を起こしている熟語はほぼ一致している事が分かる（一例「蓮華」の例外有り）。すなわち、覚如版で単声点が付されている例は周興版でも単声点が付され、覚如版で複声点が付されている例は周興版でも複声点或いは濁音符が付されている。この事実は連濁を起こす熟語が覚如版と周興版で一致している事を意味しており、覚如版で連濁を起こしている熟語は基本的に周興版でも連濁を起こすと言える。

六、[Φ] か [p] か

先の四節、五節の要点を以下に纏める。

・覚如版において、鼻音後の無声子音は確実に連濁する訳ではない。頻度の高い熟語は連濁する傾向にある事から推察すると、熟語内形態素間の結合性が連濁に大きく関係している。この事は連濁が語彙レベルにおいて行われている事を示す。

・周興版では清濁の書き分けが厳密になり濁音符が使用されると同時に、清音を表示する単声点の必要性が減じた。その為、単声点を付す事は非常に珍しく、特に注意を促すような特殊な場合にのみ使用される。

・覚如版と周興版の連濁環境下にある熟語を比べると、連濁を起こす熟語が覚如版と周興版でほぼ一致している。

さて、四節で提示した問題点は、周興版で半濁音符が付されていた字の、覚如版との対応部分には声点が付されてい

ない字を除けば全て単声点が加えられているが、その単声点の音価は、①［Φ］②［p］のいずれであったか、というものであった。右の三つの要点はこの問題にいかなる帰結を与えるのだろうか。

覚如版と周興版の間で連濁を起こす熟語がほぼ一致しているということはすなわち、一語化した語が両者殆ど重なるという事である。周興版の一語化した語は連濁或いは半濁音化によって伺われ、対応する覚如版の語もまた一語化したものと見る事が出来る。これを図示すると図1のようになろう。

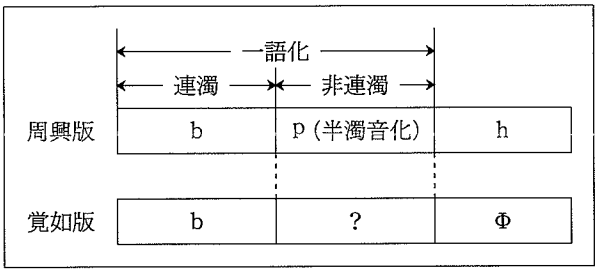


図1　一語化・連濁・非連濁と鼻音後のハ行音の音価

周興版で半濁音符を付され、且つ覚如版で単声点を付されている撥音後の例（図1の「?」の部分）は「人非人」「三寶」「轉法」「几夫」「轉法」「三寶」「檀波」の七例である。これらは周興版で半濁音符が付されているのだから、当然一語化した熟語であると言える。鎌倉時代においては一語化が連濁によって示されるとされ、それに従えばこれら七例も連濁するはずであるが、濁声点は付されていない。これはその単声点が［p］音化したと解釈する他は無い事になる。

また先に推定した撥音後の［p］音化のメカニズムを是とするならば、口腔からの呼気の流出を防ぐ点で破裂音である［p］の方が都合が良い訳であるから、撥音後のハ行音は一貫して［p］音化し、［Φ］はこなかったと思われる。また周興版、並びに日葡辞書の撥音後のハ行音の分布が［b］［p］に偏って現れて［Φ（h）］に現れない事を考え合わせても、これら七例の単声点が付された字は［p］音化していたと考える方が妥当である。

従って、覚如版におけるハ行音の音声的現われは表2に示す様になる。

表2　覚如版におけるハ行音の分布

	環境		音韻レベル	音声レベル
ハ行音	/Q/・/N/以外の後ろ		/Φ/(/b/)	[Φ]
	/Q/の後ろ			[p]
	/N/の後ろ	連濁しない場合		[p]
		連濁する場合		[b]

※表中の「/Φ/(/b/)」は清濁の区別を有さないハ行音である事を示す。

結び

本稿では半濁音化発生の要因、並びに半濁点表記が存在しない時代のハ行音の音価、すなわち/Φ/音素上にある異音の位置にあった［p］の実態はいかなるものかという問題について考察した。本稿は主に撥音後環境の半濁音符が付された部分の音価について考察したが、促音後環境については殆ど触れられなかった。撥音後の場合と並行的に考えて、且つキリシタン資料等の状況と照合すると、覚如版における促音後環境の単声点[23]についても［p］である可能性は高いと考えられる。

これまで見てきたように、撥音直後のハ行音は鎌倉時代には［p］となっていた事が窺われる。つまり［p］はかなり早くから/Φ/音素上の異音として存在していた事が声明資料において推定される事になる。そしてそれは半濁音化発生の原因から見ても当然の事であろう。すなわち、促音後の場合は一語化の標識として［Φ］が逆行同化する過程において音声的要因により［p］音化し、撥音後の場合では連濁しない［Φ］が音声的要因によって［p］音化する。つまり促音並びに撥音の成立と共に［p］音化が発生したと考えられるのであり、促音後、撥音後共に清音としてのハ行音/Φ/の条件異音として成立したと考えられる。そう考えれば、鎌倉時代において撥音後のハ行音に見られる［b］と［p］の対立は新旧の差、つまり通時論的な現象ではなく、共時論的な、しかも音声的な条件異音として捉えるべき現象であろう。[24]

注

(1) 本稿における「半濁音化」は音韻レベルにおける変化であり、パ行音が音韻論的に独立的な地位を獲得した事を前提にした術語である。すなわち、清音、濁音、半濁音の音韻論的な三項対立が成立している状況において、清音が半濁音に変化する事を「半濁音化」と言う。一方、日本語の歴史の中で半濁音という音韻論的範疇が存在しなかった時期においても音声レベルにおいてハ行音が［p］音に変化していた事が推定されるが、この音声レベルでの変化を本稿では「［p］音化」と呼ぶ。

(2) 沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』汲古書院、一九九七、一〇二八頁

(3) 迫野虔徳「撥音の後のパ行音——p音の発生と展開——」（『奥村三雄教授退官記念　国語学論叢』桜楓社、一九八九）八一八—八二〇頁

(4) 柳田征司『室町時代語資料による基本語詞の研究』武蔵野書院、一九九一、一〇〇頁。一部簡略化して転載させて頂いた。

(5) 『講座国語史2　音韻史・文字史』大修館書店、一九七二、九〇—九一頁

(6) この「nifon」の例に関しては疑義を挟む論が有るが、後述する。

(7) 周興版法華懺法・例時作法における半濁音符は、先掲沼本論文（九八三頁）で既に指摘されているものである。

(8) 江戸後期には喉音化したものと解釈した。

(9) この小書きの「ッ」に関しては、別に論じた事が有る。拙稿「声明資料における『ずらし表記』を巡って」（『訓点語と訓点資料』第一〇一輯）を参照。この小書きの「ッ」は底本の奥書の時代、すなわち文亀頃の実態を反映するものと思われる。従って促音の中には同一の音韻論的範疇に属す舌内入声音も含む。

(10) 前掲柳田（一九九一）九五—九六頁。

(11) 濱田敦「ハ行音の前の促音—p音の発生」（『続朝鮮資料による日本語研究』、臨川書店、一九八三）七六頁、迫野虔徳「撥音の後のパ行音——p音の発生と展開——」（『奥村三雄教授退官記念　国語学論叢』桜楓社、一九八九）八二〇頁。詳しくは後述する。

(12) 筆者がインターネット上で使用出来るテキストファイル化された国語辞書を使用し、「ッ＋ハ行音」を検索してみた所、外来語のみ（エッフェルトウ、ラッフルズ、ワッフル、ゴッホ）が検出された。

(13) 前掲迫野（一九八九）八二二―八二五頁

(14) 注12と同様に「ン＋ハ行音」を検索した所、外来語と語構成の構造上撥音を含む形態素が外側にある例のみであった。以下に若干例を示す。

アルタン・ハン、インフォーム、エセン・ハン、かいぐんへいがっこう（海軍兵学校）、かんきょうきほんほう（環境基本法）、かんこくとうかんふ（韓国統監府）、かんじんはっき（漢人八旗）、かんせいのさんはかせ（寛政の三博士）、かんはっしゅう（関八州）、かんふげんきょう（観普賢経）、きんふしょく（金富軾）、げたんは（下駄の歯）、けっせんひじょうそちようこう（決戦非常措置要綱）、げんしりょくきほんほう（原子力基本法）

(15) 前掲濱田（一九八三）七八頁

(16) 前掲迫野（一九八九）八二六頁

(17) 前掲柳田（一九九一）八五―九四頁。もう少し詳しく言うと、n撥音の場合は「音便が一般化して同化現象が進んだ」事により-nθ-から-mp-に変化したとする。またm撥音の後のp音については古代のp音が残存したものを認める。正確には更に細分化して考えているが、ここでは触れない。

(18) 前掲濱田（一九八三）七六頁

(19) 前掲迫野（一九八九）八一九頁

(20) 但し、音声レベルと言っても結局は促音・撥音の音韻論的意識にその原因が帰する事は言うまでも無く、促音後、撥音後のパ行音は促音、撥音という音韻論的範疇が出来上がった事によって生まれてきたという従来の説を覆すものでは無い。

(21) その内訳は、促音後環境が七例、撥音後環境が七例である。

(22) 但し、鼻音後に区切点などが入り、文や句の切れ目が二字の間に入る場合は除く。

(23) 周興版において半濁音符を付され、且つ覚如版で単声点が付されている促音後環境の例は「法并」「闥婆」「八部」「八部」「卒暴」「説法」「勿抱」の七例である。

(24) 但し、連濁が規則的に起こっていた時代に関しては、撥音後のハ行音は規則的に［b］となっていたと考えられ、［p］となるのは連濁に規則性が失われてからである。その意味では確かに［b］よりは新しい音であるというべきであろう。